

¡Hola, amigos!

第061号

(RとNの Cádiz からの手紙)

皆さんこんにちは。これはHPというより、日本の友人・知人の皆さんに私達の近況をお知らせする手紙のようなものです。そのつもりでお読みください。

更新は、なるべく毎週、日本時間の金曜朝05:00から07:00時に実施する予定です。臨時休刊の場合は前もってお知らせするつもりです。

なお、バック・ナンバーは最近三号分のみとし、それ以前のものも順次削除します。

では、今週号へどうぞ。

2005年02月10日 カアディスにてR y N

☆今週号のトップヘジャンプ



「ウイルス感染」の巻

みなさん、こんにちは。

PCのウイルス感染ではお騒がせしました。幸い、私達からのメールでどなたかにご迷惑をお掛けした兆候もなく、今回の騒ぎは一件落着のようですが、一時はピンチでした。このPCを買って間もない、4～5年前のことですが、当時大流行したバッド・トランスとかいうウイルスに手ひどくやられて、そのときは結局再セットアップする羽目になってしまいました。

それ以来、送受信ともプロバイダーのウイルス・チェック・サービスを受けるようにして、今回までに多分300件以上そのチェックに引っかかったという警告を受けています。それで安心していただけではありませんが、今回のはまんまとその受信チェックをかいくぐってしまったことになります。でも、私達から送信したメールにウイルスがついていたという事をどなたからもお聞きしていないのはなぜか？

ウイルス付きメールを受信したときはまだチェック・サービスがそのウイルスに対処できていなかったのか？ そして、どうもPCの調子がおかしいと気づいて、HP一時停止のメールを送信するまでの間にそれに対する防御が出来上がって、送信のメール・チェックはできるようになっていたのか？

しかし、結局送信メールにウイルスがついていたという警告はありませんでした。それとも次々とメールで蔓延してゆくタイプではなかったのか？ どうもこういう事になると皆目わけがわかりません。

日本にいたときも、メーカーやプロバイダーのヘルプ・デスクから有効な助言をもらったという経験があまりありません。第一電話がつかない。

気の短い者にはつながるまで何度もかけ直すのが苦痛です。結局コンピューターに詳しい若い世代の友人のヘルプでその都度切り抜けてきたのです。

ここではそれも通用しません。国際テレカなどを使えば電話代は以前よりは安くなったとはいえ、時差も考えながらかけないといけないし、日本までの電話はよほどの重大事でないと気軽にはかけられません。

手近には助けを求める相手が居らず、結局イギリスにいる n とその同僚のコンピューター・エンジニアが一番近い電話ヘルプ・デスクです。幸い、そのオタスケマンが有効に機能してくれました。

そして、教えてもらった最新の駆除ツールで、ウイルスは一掃できたと信じてよいところへこぎつけました。それによるとウイルスは W32.Bagle.bk という名前のもので、既に 155 個のファイルが感染していました。これを放っておくとどういふ事になったのか、最終的には前の時のように再セットアップしなければならなかったのか？ まあ、とにかくそういう最悪の事態にはならず済みました。

その後、自分自身宛や N・n 間、友人の何人かとメール交換をしていますが特に気づく異常はなく、完全復調と考えていいと思います。ヤレヤレです。

ここで改めてお願いですが、この HP がなんの予告もなく突然更新しなくなった場合は、多分 PC の不調だろうな、ぐらいい気楽にお考え下さい。

R か N が、又は両方が同時にという事もあり得ないことではありませんが、いずれにしても人間がクタバったときは何らかの形でお知らせできるでしょう。でも PC がイカれるとお手上げです。今の私達にとって PC は文字通り目であり耳であり口でもあります。離れた所にいる人との唯一の接点です。

手紙はベナルマデナの時のように行方不明になる心配は一応なくなりましたが、百パーセントの信頼はおけません。最近も友人からの航空小包が三週間かかって届きました。その後、別の友人が出してくれたものも 19 日後。ところが先の友人からの別便は 10 日。これを、異常、と考えるか、まあ、そんなもんさ、と考えるか？

外国に住むとはそういうものだという事だけはたしかです。手紙で用事を済ますのはあまりに、もどかしい。だから、メールへの応答がないと、とても気になります。ほかに通信手段があればメールを使えなくても特に不都合はないのですが・・・

*

これを書いている今、2月6日、じつに2ヶ月と3日ぶりにまとまった雨が降ってい

ます。Nの日記では12月22日にもパラッと来たように記録されていますが、アンダルシア一帯で雨らしい本降りの雨は丸二ヶ月降っていませんでした。

乾ききった畑の土をテレビで何回も見せられてきましたが、これで農家の人達も少しホッと一息つけたでしょう。今年の冬は、アンダルシアの農家にとって干ばつと冷害のダブル・パンチで、泣くに泣けない大被害が出ています。

ハウスの中でさえトマトが、ズッキーニが、レタスが、イチゴが凍ってしまったし、オレンジも樹の上で冷凍になってしまった所もあるようです。この後、野菜や果物の高値が続いて今度泣くのは私達消費者です。

南北両極の氷はどんどん溶けているというし、一方人類は相変わらず公害を撒き散らし続けているし、地球規模での異常気象はもう留まる所を知らないのではないのでしょうか？ ごく一部の先進国だけが環境保全の為の努力をしたって、目立った効果は上がらないのではないかと。もはや取り返しのつかないところへきているような気がしてなりません。怖いのはなしです。

さて、記録的な干ばつはどうやら一段落したものの、北は勿論、アンダルシア東部でも厳しい寒さが続いているようです。自然現象の予測は全く当てになりませんが、春の祭りカルナバルと共に街には春が確実にやってきました。

リオのカーニバルはあまりに有名ですが、スペインもカトリック国ですから謝肉祭は賑やかに行われます。特にここカアディスとテネリフェのものはスペインでは一番の評判を取っているようで、中央のテレビでも報道されています。

謝肉祭については私達は詳しいことは何も知りません、漠然とキリスト教徒の春のお祭りなんだなという程度の知識しかありません。百科事典でも引いてみて下さい。その百科事典などによると大体3日間から数日間としているようですが、カアディスのはなんと2月3日から13日まで11日もの間ぶっ通しです。

期日は復活祭の時期次第で毎年ずれるようです、月の満ち欠けに関係します。期間も変わるのでしょうか。とにかく今年は3日から13日まで11日間です。



(旧市街への入り口プエルタス・デ・ティエラ Puertas de Tiera の電飾)

どうも辞典などに出ている説明とは少し違うようですが、なぜそうなのか、なんて分かるわけありません。お祭り好きがこうじて段々長くやるようになってしまったんじゃないのか？と思うほどお祭りが好きな人達です。この後、3月下旬の一週間はセマナサンタだし、とにかく年がら年中お祭りお祭りです。

その間仕事なんか手に付かない人も大勢いるんでしょうね。この世界では「勤勉」は必ずしも「美德」ではないんだなという事を改めて感じます。

ところが、祭りが始まるのを待っていたような久しぶりの雨でお祭りは散々です。今日は日曜で祭りも最高潮だろうとNは前から楽しみにしていました。しかしどうも私達にはよくわからないことに、パレードが何時にどこからどこまでという事をはっきり表示したものがありません。カルナバルは3日から13日というポスターはアチコチに貼ってあります。交通規制の立て札も大通りのアチコチに出ています。でも書いてあるのは日にちだけ。

これはカルナバルだけの事ではなく色々な場面で直面する事実です。例えば劇場公演なんかでも何月何日どの劇場で、までは表示してあっても開演・終演の予定に触れているものは少ないのです。後は電話でなり聞いてネ、という事なんでしょう。結局、私達は切符売り場まで行かないと判らないのです。普通の発想では何時に始まるかも大事な情報だし、同じ位に何時に終わるのかも大事ですね。公共の交通機関で帰って来れるかどうか？遠くから来る人にとっては大問題です。



(市庁舎前、これは祭りの2日目。私達は賑やかになるのはどうせ遅くになってからだろうと勝手にきめこんで、出遅れ。旧市街へ着いたときは宴の後)

例外は、例えば野球のナイト・ゲーム。これは延長に次ぐ延長で翌日の日付になってしまうなんてこともありましたネ。どうやら全てをこの調子で考えればいいのではないかと思います。それにしても、大体の開始時間ぐらい表示してくれてもいいんじゃないの？そう思うのは外国人の私達だけなんだろうか？

祭り期間に入って最初の日曜日。Nは朝からソワソワ。けれどもRはお祭り騒ぎには極めて冷淡。昼過ぎ、たまりかねてNは、チョット様子見てくる、と出てゆき、やがて腑に落ちない顔で帰って来ました。聞く人、聞く人、言う事が違うらしい。

まあそれでも、どうやら夕方5時か6時ごろには始まるらしい事は掴んできました。場所もハッキリしないけど、とにかくメイン・ストリートには交通規制の札があるんだからそこを通ることは間違いない。じゃあ5時ごろになったら付き合いましょう。午後4時ぐらい、海面を見ていると段々暗くなってきました。今、日没は7時チョット前ですからこれは明らかに雨の前兆。傘もって出ないといかんナ。案の定5時前に外へ出るともう降り出していました。近くのメイン・ストリートの歩道はパレードを待つ人で一杯です。私達も四つ星ホテル前の広場に陣取りました。

人々は雨に濡れるのもかまわず待っています。傘を持っている人は半数ぐらい。後はビニール・コートを被った人もいますが濡れ鼠の人も大勢います。



(雨に濡れてパレードを待つ人達。予定は分からず、只ヒタスラ待つ。辛抱強い)
ところが5時半になっても6時になってもパレードがやって来る気配はありません。雨はますます強くなっています。Rはそろそろガマンの限界。周りの人垣もくずれ始めてきました。オレもう帰る。私はもう少し。と我慢強い人もいます。でもRが帰ってから30分ほどでNも帰ってきました。結局パレードは来ぬまま、広報カーなどで中止の触れがあった様子もなく、通りを埋めていた人もなんとはなしに少しずつ散っていったようで、シマラない話です。

その後がどうなったかは分からずじまい。ウチからはメイン・ストリートは見えないんですが、パレードが通れば、賑やかな楽隊の音は聞こえるはず。それもなかったところをみると、本当に中止になったとしか思えません。

ここで、前々号の公現祭のパレードの情報を観光案内所に聞きに行った時の話を思い出してください。観光案内所でさえパレードの予定を知らずアチコチ複数の電話をかけてくれてやっと分かったんです。

カルナバールのパレードは、これ目当てに外国からの観光客も大勢来ているはずで、案内所も「シラン」ではすまないでしょうから、聞きに行けば分かった筈です。でも私達は行かなかった。そうするとモー皆目わからないのです。

この国では表示というものがない、又は、少ないとは度々言ってきましたが、とにかく情報の伝達が口から口へ、に頼っているという気がしてなりません。そして、普通一般の人に聞くと、当然夫々の人の理解の程度には差があつて、だから聞く人ごとに

答えに少しずつズレがあるのです。聞けば親切に教えてくれる事も何度も言いましたが、それは間違いのない事実です。ただ、その親切さが正確さの保証にはなりません。情報の伝達が表示によらない、という事は言葉の不自由な私達にとってはまことに不都合です。字で書いてあれば、辞書を引き引き何とか理解出来る事でも、聞く・話すとなると少し込み入ったことはお手上げです。まあ、それでも、その困難さを楽しんでいる、といったら負け惜しみでしょうか？ というわけで、パレードの様子はまた次週にでも……。見ることが出来たら、のはなしですけどね。



(チュレリア、チューロ=揚げ菓子の屋台。終夜営業らしいけどサスガに夜中を過ぎると この通り、客足も途絶えて……)



(こちらはショコラテリア。深夜1時、いくらなんでも子供は寝る時間)



(若い二人にはまだこれからの時間)



(電飾は既に春)



(ツロオン=アーモンドなどを餡で固めたお菓子。昔懐かし、タンキリの屋台)

話も写真も前後しますが、これらの夜のシーンは祭りの二日目2月4日の夜のこと。公現祭の印象が頭にあったのでどうせ賑やかになるのは夜のことだろうと思っていました。だってその日は金曜日、平日ですからね。ところが案に相違して9時半頃市庁舎前に着くと既にならんとして人通りもポツポツ。これにはビックリでした。

なにしろ花金です。普段だって金曜の夜は深夜まで人通りが切れることはないのに。だから、お祭りだというのにこんな淋しい光景しか撮れませんでした。

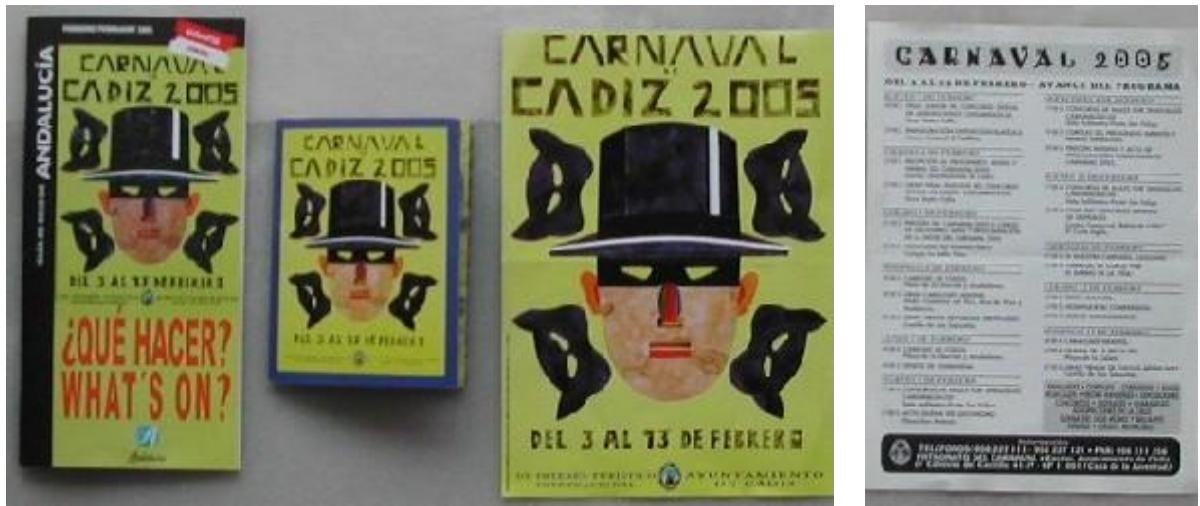
旧市街へのバスで、私達の後ろの席にいいゴキにデキ上がった40前後のオジさんがどっかと座り、ドウ・ユー・スピーク・イングリッシュ？と来ました。

自分からそういった割にはあまり英語は話せない様子でしたが、とにかく私達に向けてコボしっぱなしにコボすんです。何をだと思いませんか。

カァデイスのヤツはどいつもコイツも働かない、オレはこんなに働いてるのに、と自分の手を見せて、パードレもマードレもイーホも誰も働かない。働いてるのはオレだけだ。と、こんな具合。グチるだけで泣き上戸でなかったのは幸い。なるほど手の平には幾つか豆が出来ていました。一応ちゃんと背広を着て、ブルー・カラーではなさそうなヤワな手です。察するところこのオジさんどこかの自営業の社長さんらしい。いつもは力仕事は従業員がやってくれるのに、お祭りにとられて戦力がガタ減りになった、仕方なく自ら力仕事やっては見たものの、慣れない仕事でヤワな手にはマメはできるし、疲れるし、終って一杯引っ掛けたらドッとまわってしまった。先代社長の父親も、次期社長の筈の息子もみんな祭りに夢中で家業を振り向きもしない。そんなところでしょ。それにしても、スペイン人のお祭り好きを私達にコボされてもネー。まあ、とにかくそんなこんなで5日目の月曜日、大通りの交通規制札を見ればこの近所、新市街でパレードを見れるのは今日が最後のはずです。日曜に続いて空はドンヨリ雨模様。Nは、旧市街の観光案内所へ行ってくる、と小雨の中を出かけました。

お祭り好きという点では決してスペインの人達に負けてませんねー。気合が入ってます。なにも傘差してまで出かけなくたって……。Rは真っ平ゴメンコール。

Nはじきに帰ってきました。Nが部屋に入った直後、たちまち空が真っ黒になり大粒の雹が降ってきました。寒冷前線通過です。ほんの5～6分をやみましたが、いいとき帰って来たものです。そして、Nは大きな収穫も持って帰って来たのです。



左の冊子はアンダルシア州全部の行事予定表とその内容の解説。西・英両国語で書いてあり、明らかに外国からの観光客を視野に入れたもの。

真中の小さい冊子は期間中11日間の全プログラム。カバルガータ (cabalgata=行列) が通るコースの地図までついてます。このカバルガータという単語すらこの小冊子を見て始めて知った始末。辞書によると「騎馬・山車・踊り手などのにぎやかな祭り行列」となっています。昨日雨の中大勢で待っていたのは正にこれだったんですね。

ほかの日にも行列はありますが後は全部旧市街の狭い道路のコース。新市街の大通り一杯を使ってやる大規模なものは残念ながら雨でお流れになってしまったわけ。

そして、驚いた事にこの小冊子には事細かに各行事の時間表までついてるんです。

そしてさらに驚いた事は、右のやや大きいもの。これは見たところアチコチ商店のウィンドウやバルやレストランのガラス窓に貼られているポスターを9分の1に縮刷したものだと思われます。その裏をみてビックリ仰天。全日程の時間つきプログラムが印刷されているんです。ガラス窓に表面を表に向けて貼れば、店の中にいる人には裏面のプログラムが読めるし色刷りポスターも外の強い太陽光で透けて見えるんです。

Nは、この小さい紙だけがそうなんじゃないの?といますが、いや、そんなはずはない、これはポスターの現物をソックリ縮刷したものだとは確信しています。

表からでもポスターは見えるけど、プログラムを知りたいければ店に入ってセルベサの一杯も呑みながらドウですか?というニクイ仕掛けだった。ソー思いたいですネー。

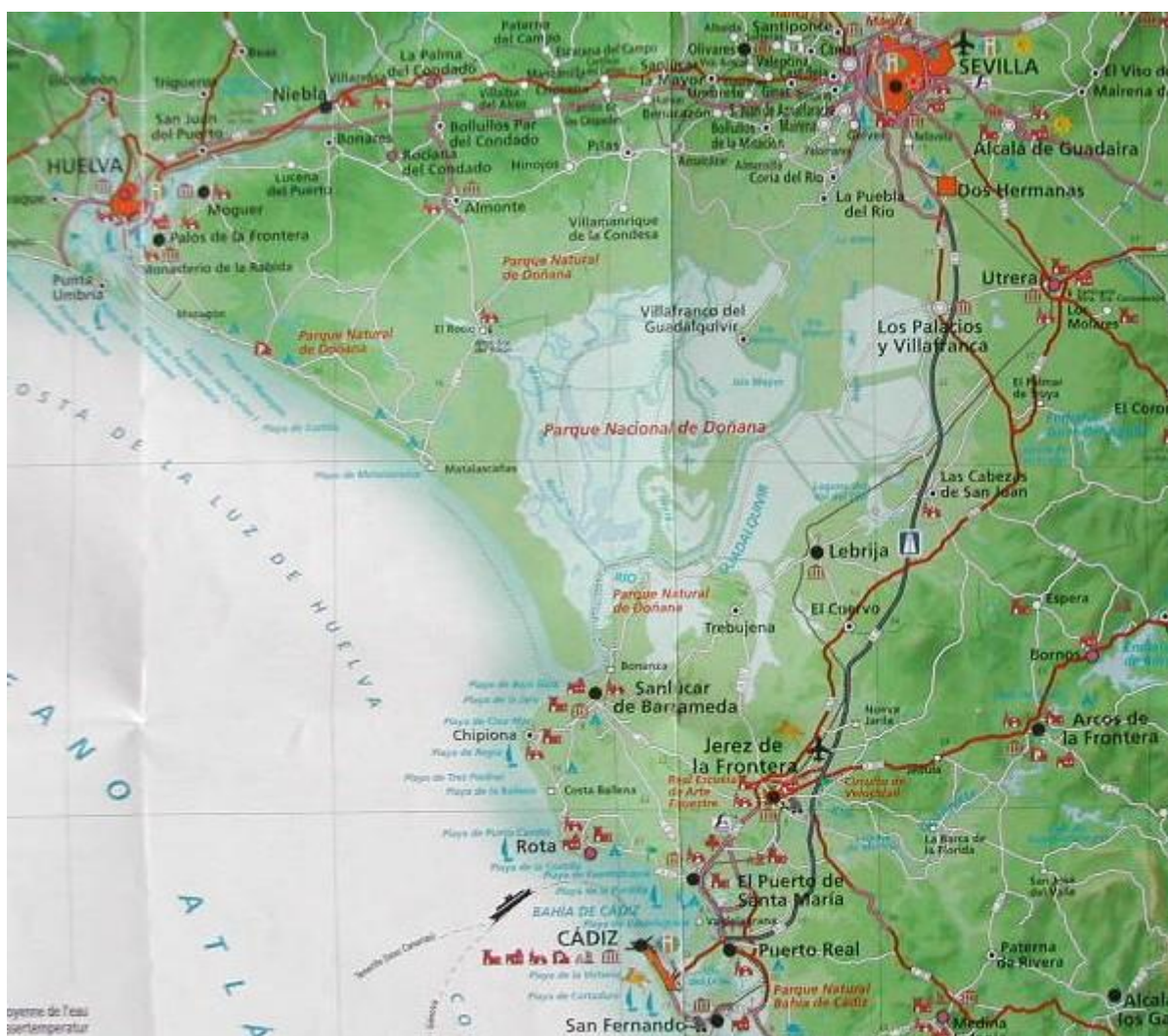
まだ、この時点では確認はしていないけど、こりゃポスターがあるうちに是非ヘレスでも呑みにどっかのバルに入って、中から見てみなきゃ。***

「ヘレスの香」の巻

ヘレスとはヘレス・デ・ラ・フロンテーラ(Jerez de la Frontera)という町のことであり、同時に英語のシェリー、あのシェリー酒のことでもあります。

空路を利用してカアディスに来ようとするれば、一番近い空港はこのヘレスです。そこでこの空港の便利度はどんなものか、一度行ってみる必要があると思っていました。

カアディスとヘレスとセビージャの位置関係は次の通りです。



この通りカアディスからの距離はセビージャ迄の半分以下、電車の所要時間もセビージャ迄約1時間45分に対してわずか45分、それよりもっと大きいメリットはカアディスからヘレスまでは近郊電車の運行区間なのでカアディスからセビージャ行きの中距離電車に較べてはるかに本数が多いことです。

ヘレスへはベナルマデナに住んでいた時にバス・ツアーで一度行った事がありますが個人で行くのはこれが初めて。カアディスへ部屋探しに通っていた頃は電車でも良く通ったし、長距離バスを乗り継いだ事もありましたがいずれも通過しただけです。

今日の目的は二つ。まず、市内から空港への足の便を確かめる事。もう一つは、レロイ・メルリンという名前の東急ハンズのような店に行ってみる事。この店に行けば私達の欲しいものが一杯あるだろうし、実際は何も買わなくても、見るだけでも楽しいに違いない。ナニセ私達は東急ハンズ大好き人間。殆ど「見るだけ」ですけどね。

こういう目的でヘレスに来た日本人は恐らくいないでしょうね。普通なら王立馬術学校やヘレスの醸造元＝ボデーガ(bodega)の見学とかが目的になるでしょうが、私達は既に両方とも経験済み。だから観光案内所のオニーさんもヘツという顔をしました。

そりゃそうですね。空港はまだしも、日本から遥々日曜大工の店に来たのカー？ ホントニー？ という顔。それでも、質問にはちゃんと答えてくれました。

まず、空港へ行くバス便はないこと。交通機関として利用できるのはタクシーのみ。驚きましたねー。いくら小さいと言っても国際空港ですよ。そこへ行く公共交通機関がないとは……。ビックリよりガックリ。

それでタクシー賃は？ 大体11～2ユーロ。これも気にいらぬ答。今までの経験で、およそ空港が絡むとタクシー賃はろくなことありません。まず、メーターは使わないことは間違いない。そして日本人みたいに甘い顔するヤツからはフンだくるわけです。だから案内所で11～2と言うんならまず15は覚悟しなきゃ。

世の中には言い値を値切ることに無上の喜びを感じるという奇妙な御仁もいらっしゃるようですが、Rはこれが大の苦手、いまだ嘗て物を値切った経験はありません。だから当然対面販売は大きらい、スーパーのようにキチンとキロ当たり単価まで表示してある所が好き。そしてさらに黄札になっていればなおヨシです。

往復30ユーロ？ 冗談じゃネーヤ、晩酌ビノ10本以上買えるじゃないの、ヤメヤメ、どうせ飛行機だって減法便数の少ない利用価値の殆どない空港なんだから。

見に行くだけなのに、ビノ10本分も取られてタマルカ。と、これはNとの会話、オニーさんに噛み付いたわけではありません。勿論。

次に日曜大工。これはオニーも地図を見ながら、後ろに座っている親分に聞きながら

の説明です。市内とは言ってもどうやら工場団地みたいな所で市街地からは外れているらしい。それでもそこへは4番のバスが行っていて終点で降りればいいと分かりました。バス停も案内所のすぐ前と好都合。ムーチャス・グラシラス、アディオス。その4番のバスが難物で私達が乗ろうとした時間帯、正午近くは1時間に2便しかありません。まあ待つしかない。日本の、特に首都圏では殆ど経験しない、交通機関を長時間待つ、という事をあまり苦痛と感じなくなってきました。

仕事で動くわけではないから急いで何かをしなければ、今日中にコレとアレをやっつけてしまわなくては、という事がないからこそその台詞です。現役の頃はこれでも日本人の端くれ、何もかもセカセカと急いで急いでやってきたのです。

バスは何台も来ますがみんな違う路線。どうやら初めからずっと待っているのは4番を待つ人、即ち私達と、ほかにスペイン・オバサン三人。

かれこれ30分も待ったでしょうか、ヤット4番が来ました。私達はスペイン・オバサンに敬意を表して後ろに下がっていました。すると、劇画なら「ヌワント」と書くところでしょうがバスはそのまま通過して行ってしまったのです。啞然・愕然・呆然の三乗とでも言いましょうか。

オバサン達は平然。またオシャベリに熱中です。アノー、バスは何故行ってしまったんでしょう(我ながらマヌケな質問)。手を上げなかったからですか？ アア、違う違う、そうじゃないの満員だったからよ、次を待てばいいの。

待てばイイノったってモー散々待ったのに。満員だったって？ ソーは見えなかったけどナー。もうこれには憤然・慥然・悄然。

エーイ、これもヤメヤメ。冗談じゃネーヤ、これ以上待つてられるかってんだ。と、つい地が出てしまうところが修行の足りてない悲しさ。後十年もスペインに住めばオバサン達と楽しくオシャベリしながら次を待てるようになるかな？無理だろうナー。今日の目的は二つともパーですね、さて、じゃあどうしよう、しょうがない市内見物でもするか、「仕方無しに」観光客に変身。

あるべきバス便がなかったことと、便はあったのに乗れなかったことでカッカしたことを反省しつつ街歩きを始めました。私達が知っているスペインの街の中ではどちらかと言うとやや雑然とした印象です。それでも歩いているうちにナカナカ魅力的な建

物があつたり、いかにも古そうないい雰囲気の一部もありました。

そして、フト気がつくと、なにやらいいニオイがします。慢性鼻炎であまりきかなくなった鼻をクンクンさせていると、どうやらNも気づいているようです。そうだ、こりゃーヘレスのニオイだー。そこは或るボデーガの裏道、目の前がヘレスを樽に入れて

て寝かしておくための酒倉、いわゆるボデーガだったんです。

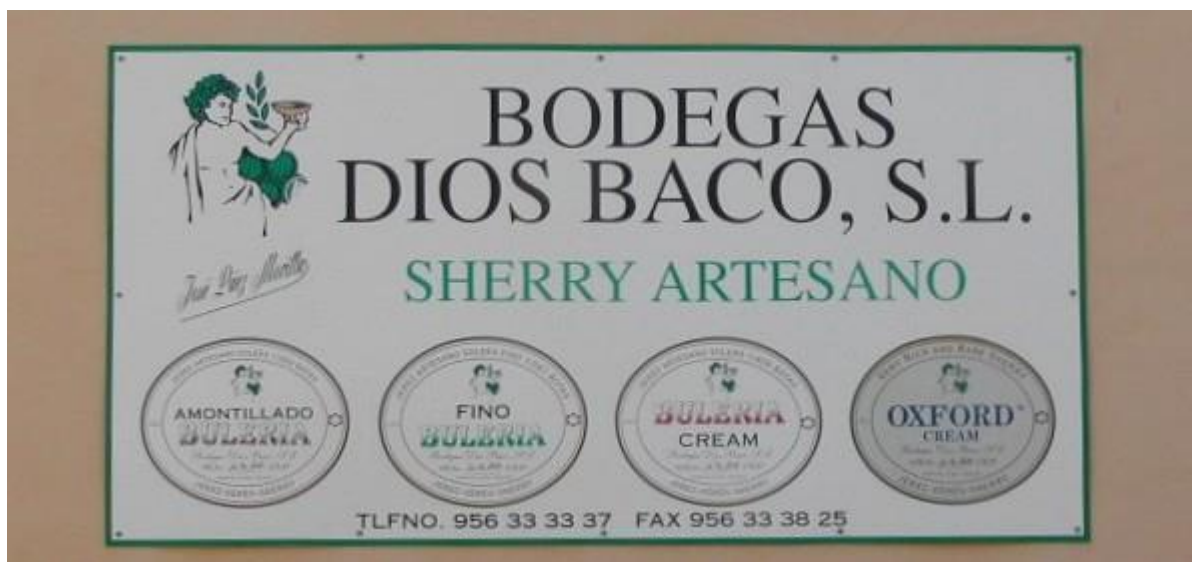
ボデーガとは元々倉庫、特に酒倉のことです。ビノ(ヘレスもビノの親戚です)は出来てから酒倉で寝かす事が必須で、醸造所には必ず酒倉ボデーガがあるのでビノ醸造元の意味でもボデーガというのでしょうか。船の貨物倉もボデーガで、フィリピン・クルーと乗れば必ず耳にする単語です。彼らはスペイン語の単語を多用しますからね。

そこにあつた窓ガラスから中をのぞくと、あるある、沢山のヘレスの樽が薄暗い酒倉の中で静かに眠っています。



周りを良く見るとそのあたりはアッチもコッチもボデーガだらけ、これじゃヘレスの香がするのも当たり前です。テイस्टィングをさせてくれるボデーガのショップの看板もありました。勿論これを見逃すわけはありません、早速入ろうとしたら、残念、

シエスタ休みで閉まってました。



看板に英語表記があることにお気づきですか？ どうやらヘレスの街にはかなりイギリス人が定着しているようです。ブリストル・シェリーと言って昔はヘレスの南南西エル・プエルト・デ・サンタ・マリィア(El Puerto de Santa María)からブリストル向けにシェリーを出荷したんですね。英語名のボデーがいくつかあります。



これはヘレス銀座とでも言うべきカジェ・ランセリア(Calle Lanceria)。二時間前私達が観光案内所を目指してここを歩いたときは人が溢れていたのに、シェスタの間になるとこの通り、昼日中のひっそり。正面はエル・ガジョ・アスール (El Gallo Azul=青い雄鶏) と呼ばれる建物で旧市街のシンボル・タワー的建物です。

写真のデキが悪くてハッキリしませんが、手前中央は小さな時計塔でそばの赤シャツの人の向こうに木の椅子・テーブルが出してありました。そこは日当たりも良くテーブルの脇にはヘレスの空き樽が積み重ねてあってちょっといい感じです。

ヨシ、今日のコミーダはここ。ハモン・ケソ(ハム・チーズ)とサルモン・ケソフレスコ(鮭燻・フレッシュチーズ)のボカディーヨ(スペイン風サンド)。それに勿論カーニャ(caña=生ビール)もふたつ。

最近は何多に外食する事はありません。どうしてもと言うときはボカディーヨ専門。安い、早い、当たり外れが少ない、油も濃すぎる味もない。欠点は野菜が入ったものは殆どないことですが、野菜はその日帰ってから補充すればいいと考えています。このテーブルの持ち主は左手にあるバルですが、こうやって店から10数メートルも

離れた道路の真中で営業できることがどうも不思議でなりません。ここは周年ホコテンで車は通らないにしても、何の規制もないのでしょうか？

セルベサが来て喉を潤してから、Nの写真を撮っているとバルのカウンターで呑んでいたジー様が私達にウインクしていました。暫くするとカマレロ(ウェイター)が出てきて二人の写真を撮ってくれました。あのジー様は多分店の常連で、カマレロに、オマエあの二人にシャッター押してやれ、とでも言ってくれたんでしょうね。

こういう、見知らぬ他人へのちょっとした親切というか愛想のよさは、私達東洋人に最も欠けている面だと思います。せいぜい愛想良くしなければとハンセイ。バスに乗れなかったぐらいでカッカしちゃーいかんなー。***
